



テルツァギ教授は 1963 年 10 月 2 日めでたく満 80 才の誕生日を迎えられたばかりであったが、それから間もなく 10 月 25 日に惜しくも逝去された。

近代土質力学と基礎工学の創始者であり開拓者であるテ

ルツァギ教授の偉大な業績と高大な名声は世界にあまねく知られている所で、多くの人びとが驚ろきと悲しみをもって巨星ついに墮つる感を深くしたことであろう。

テルツァギ教授は 1883 年ボヘミアのプラークにおいて軍人を父として生れ、1904 年オーストリアのグラーツ工科大学機械工学科を卒業したが、在学中から地質学に深い関心を持ち、卒業後の数年を現場に過すうち、土工および基礎工の分野がとくに立遅れており解決を要する未知の問題を多くかかえていることに気付いて、土質力学の研究に志ざしたといわれる。1912 年に最初の訪米、翌年末オーストリアに帰国、第一次世界大戦にあい従軍、1916 年トルコのイスタンブール工科大学で機械工学を講ずるかたわら、土質力学の研究に従事した。当時の研究テーマは砂層上のダムのパイピングによる破壊と粘土層上の基礎の一定荷重の下における沈下の問題であった。

粘土に関する実験結果から現代土質力学の基本原理解が確立されたのは 1921 年であった。その中でもっとも重

要かつ今日よく知られているものは粘土層の圧密に関する理論、すなわち、粘土層の表面に加わった荷重は始め粘土間げき中の水分によって支えられ、次第に粘土の粒子構造に伝えられてゆくという理論である。1923 年に発表された論文において圧密過程を表わす基礎微分方程式が提出され、これによって粘土サンプルについて室内実験を行なうことにより粘土層上にある構造物の沈下速度を計算することができるようになった。この方程式はまた粘土の圧密過程が熱の伝導と類似する現象であることを明らかにした。この論文は発表当時あまり注目を引かなかったが、1924 年オランダのデルフトで開かれた第一回応用力学国際会議で圧密理論の論文が読まれ、大きな反響と称讃を受けた。1925 年に有名な *Erdbaumechanik auf Bodenphysikalischer Grundlage* が出版され、教授の名声を不動のものとし、MIT の客員教授として招ねかれた。その後 1929 年ヨーロッパへ帰りウィーン工科大学教授として約 10 年を過し、その間に 1936 年第 1 回土質力学基礎工学国際会議に議長を務めその後ひきつづいて議長の席にとどまり終りに名誉会長となった。1938 年三たびアメリカへ渡りハーバート大学の客員教授となり、終りは名誉教授として終生変わるところなく研究と教育に専念し、発表論文は 250 編をこえ、五大陸にわたって土質力学と基礎工学における多くの難問を实地に解決して偉大な功績を残した。

[筆者：正員 工博 東京大学教授 生産技術研究所]

最近の基礎工法頒布

最近の基礎工学の進歩は非常に注目をあつめつつあります。人間は古代よりいろいろな建築物を造り、今日に至りました。しかしいくら立派な建築物でも大地に根ざす基礎がしっかりしたものでなければ危険の上もありません。最近の大都市では巨大なビルディング、地下鉄工事をはじめ各種の交通施設の建設工事、また目を転ずれば国鉄新幹線工事、高速道路工事、ダム工事をはじめ各種の建設工事が急ピッチですすめられています。そこで今回はこれらの各工事を斯界の第一線でご活躍中の方々に特に御執筆願って生々しいデータを取りまとめましたので、土木・建築の工事にたずさわる方々はもとより多くの方々の参考資料となることを確信し、一読をおすすめいたします。

内 容：●基礎地盤の調査／三木五三郎●基礎施工法と土質／最上武雄●鋼ぐい基礎／大崎順彦●基礎工事の機械化／中島 武●国鉄新幹線の基礎／池原武一郎●名神高速道路の基礎／高橋脩一●ダムの基礎とその改良工法／村 幸雄●ダムの岩盤基礎／広田孝一●地下鉄施工法／西嶋国造●軟弱地盤上の盛土築堤の基礎地盤と安定処理／竹中準之介●付 録／日本沖積層分布図

体 裁：B 5 判 8 頁一段組 本文 324 ページ 付録 日本沖積層分布図 (2 色刷・B 全紙) 図表・写真多数

定 価：1 000 円 (送料 120 円) 会員特価：800 円 (120 円)